例会企画・シンポジウム
テーマ：「大学における舞踊カリキュラムの現状とその可能性」

＜パネリスト＞
福本まあや（お茶の水女子大学）
寺山由美（筑波大学）
奥野知加（東京女子体育大学）
松澤慶信（日本女子体育大学）
朴　京眞（聖心女子大学）

＜司会進行＞　村田芳子（平成国際大学）

【本企画の趣旨】

舞踊学が多様な研究対象や研究手法を含んで展開されているように，日本の大学における舞踊（ダンス）のカリキュラムに関しても，その位置づけや授業科目名，理論や実技などの授業形態など多岐にわたって実践されている。例えば，その位置づけは，体育スポーツ系の大学・学部にあるもの，幼児教育にあるもの，芸術文化系大学・学部にあるものなどであり，その内容についても，教職課程に必要なダンス実技や教材研究，舞踊専攻生のための科目，芸術の中で位置づけられる科目など様々である。このような大学における舞踊のカリキュラムは，各々の大学・学部の設置趣旨に基づき設定され，しかも近年の大学改革によって多くの大学でカリキュラム改訂が進んでいる。

2006年開催の本例会企画において，同様のテーマで，国立ならびに私立のいくつかの大学の舞踊のカリキュラムが紹介されたが，それから十数年を経て，舞踊のカリキュラムをめぐる状況は大きく変化してきていると思われる。時代のキーワードでもある国際化，地域貢献，アクティブラーニング，横断的プログラムなどにおける舞踊の可能性が注目され，舞踊を学ぼうとする学生も増え，新たな舞踊の学科やコースが新設されている。その一方で，教科再編による舞踊の危機，教員養成大学におけるダンス専門の専任の減少，近年全国に新設されたスポーツ系大学におけるダンス専任の不在などの危機的な状況もあり，大学における舞踊の教育・研究の充実を妨げている。

今回の例会企画では，様々な特徴を持つ４つの大学の舞踊カリキュラムに関する話題提供と，全国の舞踊カリキュラムの状況調査の報告を通して，大学における舞踊カリキュラムの現状を捉え，大学でダンスを学ぶ（学ばせる）意味は何か，何を大切にしていけばよいか，未来に向けた課題と可能性について考える。

なお，本テーマの内容は，本年12月に開催される第71回舞踊学会大会のテーマ「舞踊学の現在とその可能性」（案）に連動していくことも企図している。

なお，次頁からの５名のパネリストの発表報告については，最初に事前に提出された抄録原稿を掲載し，その後に，当日の発表の内容を，最後に討論の内容を報告している。

（文責：村田芳子）

大学における舞踊教育の現状と課題
－お茶の水女子大学の場合－

お茶の水女子大学　福本まあや

プロフィール

お茶の水女子大学舞踊教育学科（当時）卒業後，海外遊学を経てソロ及びグループでの舞踊活動を行う。石黒節子，S. リンケにモダンダンスを，蝉丸に舞踏を，A. ハーウッドらに即興法を学ぶ。その後，同大学大学院に戻りコンタクト・インプロヴィゼーションの系譜や原理についての研究を行う。2007年富山大学芸術文化学部助教，2014年同准教授，2015年お茶の水女子大学基幹研究院人文科学系助教。現在に至る。

＜担当科目＞

学部：「モダンダンス・テクニック（初級）」「舞踊創作法実習（即興創作）（構成法）（舞踊上演・制作）」「舞踊上演法実習（初級・中級・上級）」「舞踊教育法実習（初等教育）」「舞踊学概論」「舞踊芸術学」「舞踊文化論」及びこれらの演習科目と「特別研究」など。

大学院：「舞踊芸術学特論」「舞踊表現論」及びこれら演習科目と論文指導など。

発表趣旨

本学の舞踊教育学コースのディプロマポリシーは「舞踊やスポーツといった人間の表現行動を理論的に分析する能力，およびこれを実演・適用できる実技力や実践力を身につける」である。学校体育の枠組みにとらわれずに舞踊やスポーツを表現行動という視点から，問題意識をもって対象を捉え理論的に分析する力や，そこで得られた知を実演に活かす実践力を身につけた人材の育成が目標として掲げられている。同カリキュラムポリシーは「舞踊芸術学・臨床舞踊論・民族舞踊学・動作学・体育原理などの講義や演習の科目によって，表現行動を理論的に分析するための基礎的能力を習得し，実習や実技によって，理論的成果を実演・適用できる力をつける」である。

学部学生は，出願の時点で本学の芸術・表現行動学科，舞踊教育学コースを選択する。そして１年次より舞踊教育学専修プログラムが，いわゆる教養科目の履修と並行して開始する。カリキュラムの特色としては芸術系大学のように卒業制作に相当する舞踊公演への参加が１，２年次後期の必修科目（３年次後期は選択）として課せられるが，同時に卒業論文も必修であること，また中学高校の保健体育の教員免許取得のための科目を選択することも可能である点であろう。教員免許取得を希望する学生は年度によって異なるがおおよそ全体の約半数。一方で学部3年後期に舞踊系の研究室を選択する学生はもちろんのこと，スポーツ系の研究室を選ぶ学生もほとんどが３年後期にいわゆる卒業制作に相当する科目を選択する。

こうした幅広い選択肢をカリキュラムとして提供することによって，実技も理論も広くはなるが浅くもなるという葛藤を，海外の舞踊系大学との交流から筆者は強く感じている。また学生の中にも自らの専門性に自信を持てなかったり，我が国の舞踊芸術の社会的認知度の低さに思い悩む様子も見られる。そうした中で卒業時にフリーの立場で舞踊家を志す学生もいれば，教職に就く学生，一見舞踊とは関係の無い業種に就職する学生がいる。しかし，舞踊を通して学んだことと関係の無い業種なんてあるだろうか？大学院に進学し舞踊に関する論文で修士の学位を修めた者が，企業の戦略的デザイン部門や地域文化財団職員に就職してゆく。舞踊教育の学びを通して習得し洗練され得る能力の可能性を示す例として筆者は注目している。

【当日の発表】

大学における舞踊カリキュラムの現状とその可能性

福本まあや

お茶の水女子大学の福本です。よろしくお願いいたします。先ほどご紹介いただいたように，着任４年がたったところです。

ここでは，学生がどういう生活をして，どういう授業科目を取って，どういう進路を取っていくか。続いて，私が，海外の他大学と交流する中で感じている本学の問題―また，それは日本の舞踊教育の問題かもしれませんが―を，述べさせていただきたいと思います。

(1) 大学における舞踊教育の現状

お茶の水女子大学には，学部と博士前期課程（修士），博士後期課程（博士）で，舞踊を学ぶことができるプログラムがあります。

１年生の入学の時点で舞踊教育学コースを選択しますので，入学と同時に専修プログラムが始まって，同時に，コア科目，いわゆる一般教養科目を取っていく。１年次から専門実技も始まりますし，教職関連科目を選択することもできます。もう少し具体的な科目名を挙げますと，［スライドの］左側に，先ほど言ったコア科目と専修プログラムと自由選択科目というそれ以外の単位配分と，そのうちの専修プログラム，必修プログラムのうちの必修科目を，右側に表にして挙げたものがあります。必修は非常に少ないし，必修だけを見て，傾向が分かるかどうか分かりませんが。ご覧のとおり，創作法の実技と，舞踊芸術，民族舞踊，臨床舞踊，体育原理，動作学の講義が必修で，芸術，民族，臨床，スポーツ文化，動作学，それぞれの先生の研究室に分かれていくことになります。

これを見て，分かるかと思うんですが，必修科目には，スポーツ科目はありません。スポーツ科目の履修を避けることも，可能といえば可能な状況です。中学校，高校の免許を取得，保健体育の教員免許を取得したいと希望する学生の場合には，関連科目のスポーツ実技などを履修することで取

得することができます。「舞踊の学生も，スポーツやっているんだね」という声が掛かるときがあるのですが，その通りです。

その他の実技科目としては，同時に，５つの研究室を開催しているということもあってか，開講科目数にも制限が生じてきてしまいます。その中でも，「舞踊創作上演法」―これは，夏の神戸コンクールに参加する学生たちのためのもの―，それから，集中講義や半年開講の非常勤講師による科目がいくつかあります。科目の名称から，内容は想像してもらうしかないんですが，例えば「表現療法講義演習」では，アレクサンダーテクニークの先生をお呼びしたり，野口体操をやったりとかですね。また，「民族舞踊実習（発展）」では，ギリシャ舞踊だったり，沖縄舞踊だったり，いろいろな舞踊を開講しています。それでも学生にとっては，実技科目の数が少な過ぎて，２年生位になると，だんだん絶望的な気持ちを抱く学生が出てきます。

つまり，「日本の社会では，舞踊芸術では食べていけないし，認知度も低いし，一体，自分は何に向かっていけばいいのか」っていう，ちょっとした不満が聞こえてくるようになります。この状況の改善策として，これまでの先生方もされていたことなのですが，舞踊がもっと社会の中で息づいている，もっと力強い舞踊愛好者たちがいる国に連れて行く。そこでの研修に参加するという機会を設けています。

この写真は，フランスの国立ダンスセンター。パリの郊外にあるんですが，そこの，マチルド・モニエ所長が，私が着任した１年目に，本学に来られ，Campingという毎年６月下旬に，各国から舞踊系大学，または，美術系大学の学生が集まって行われる２週間の研修旅行に，招待してくれるようになりました。招待といっても，ほとんど自費なのですが，参加できると。それは，今年は台湾でも行われるので，台湾にも参加することにもなっています。こういうところに行って，いろんな経験をすることで，舞踊とは何かとか，作品を交流することで，学生は自分がやっていることが，それほど間違っていないとか，舞踊がそれほど弱いものではないということを学んでいったりします。また，日本の状況も，客観的に見ることができるようになっていきます。

３年生の後期には，卒業論文の指導教員の研究室に分かれるので，ダンスとは違う研究室，例えば，スポーツ文化とかバイオメカニクスとかを選択する学生もいます。そういった研究室を選択する学生も，３年後期の選択科目である，いわゆる卒業公演に向けての授業を選択します。この授業は，「舞踊創作法（舞踊上演・制作）」ということで，卒公のチラシを作ったり，企画全体を考えるという勉強もします。ただ，指導が不十分だなと感じることは，舞踊家として活動していくためには，ある程度のプロデュース力が必要です。こういった広報デザインとかも，結局はプロデュース。そういった授業が，他に科目としてないっていうのが残念だなと，私は個人的には考えています。それはちょっと，広過ぎるかもしれませんけどね。

卒業後の進路ですが，４年生になると，４月には卒業公演のために踊りますが，その後は，実技科目はなくなって，卒業論文を―副論文ではなくて，完全な卒業論文として―書くということになりますので，それに時間を費やすことになります。就職はこのように，企業就職が半分位。年によって，かなり違います。他には，公務員を目指すとか，保健体育科目の教諭になる学生も少し出たり。あとは，たまたまバレエ団にコネクションがあるとか，または自分で挑戦して舞踊家になっていく学生もいますし，進学する学生もいます。博士前期課程後の進路もほぼ，同じように。博士後期課程進学後になると，高等教育機関に就職していく学生が多いと思います。

(2) 大学における舞踊教育の課題

現状における課題を考える上で，私が海外で受けた２つの指摘から始めたいと思います。これは昨年フランスで，韓国，香港，台湾の舞踊系大学の教員と，日本から私が，パネリストになって行われたシンポジウムの席で，香港からの司会者に，指摘された言葉です。「日本には，舞踊構成法を学ぶことのできる大学はない，と大野が言っていた」。大野というのは，大野慶人さん。舞踏家の方ですね。この指摘を，二重の侮辱として，私は捉えたわけです。一つは，舞踊専攻学生を引率している私に対して「舞踊構成法を教えてないんじゃないか」という指摘。それから，もう一つは，大野さんは男性ですから，「女子大だ」と，「なぜ女子だけなんだ」ということですね。しかし，そもそも舞踏の人が，大学で構成法を学ぼうとするでしょうか。舞踏はアカデミズムから脱したところで新しい表現を勝ち得たわけですから。そうした説明をしながら，「ああ，これは３つ目の侮辱でもあるんだ」と感じました。つまり，日本が国際的に誇ることのできる舞踏でさえ，日本の芸術教育から生み出されたものではない，という指摘です。ということで，この指摘は猛烈な一撃で，同時にこれは，お茶大だけでは解決のつかない課題のように感じていて，今も考えているところです。

それから，もう一つの指摘というのは，「台北芸大は学術面重視，お茶大は教養系の大学なんですね」というもの。この「教養系の大学」というのは，専門ではなく教養科目でダンスをやってい

る，ということではなくて，幅広い科目群を学ぶ教養学部的な特性を持っているんですね，という指摘です。これに対しては「お茶大も研究者も舞踊家も輩出しています」と反論したのですが。ともかく，こういう指摘を受けたのです。

ただ，その後「そうかもしれないな」とも考えるようになってきました。お茶大は，舞踊芸術界にインパクトを与える人材を育成しようにも，舞踊の実技科目は比率から言うと少ないです。施設も限られています。舞踊学術界にインパクトを与える研究者を沢山養成しようとしても，実技と並走しているため学部の時点で，芸術系の関連講義科目を学ぶ時間も限られています。また，教員は実技と論文指導の両方を担当している。国立の舞踊専攻のある大学で，こんな例が他国にあるのかなと考えてしまいます。

ただ，一方で，欧米の舞踊系大学が抱えている問題としては，一つが「経済的に安定した舞踊団からの求人が限られていて，就職難である」と。また，「ようやくプロになっても，ダンサー人生は短い。年が，35歳とか40歳が限界」である。または，けがをしてしまう。「ダンサー人生の後に，職業的な専門性を生かすことが難しい」などが挙げられる。

ところで，舞踏の大野さんは，これを全てクリアしている，すごいことなんですけども。舞踊団に頼らずに，70，80になって踊り，人生を懸けて舞踊を突き詰められるというような状況が，日本には確かにある。ただし，それはお茶大がつくってきた土壌じゃないし，それから，誰もがそういうことを大学として，できるような環境を整えているわけでもないという難しさがあります。

話を戻しますと，［企業とか公務員とか］今のお茶大舞踊専攻学生の卒業後の進路に対して，私自身，それほど悲観的になんなくてもいいのかなと考えるようになります。舞踊だけをやっていこうと思って，フリーになって芸術家という困難な道を目指すという熱意のある学生も中にはいます。が，舞踊の持つ，社会に通じる力を習得して，つまり，コミュニケーション力とか，企画力とかが求められる部署に就職していく学生も多く見られます。本学のカリキュラムはそういうことに成功しているのかなと，考えるようになりました。

もともとミッションとしては，舞踊のできる体育教員の輩出というものもあります。教職科目の履修者は今も多いですが，実際に教員になる学生は少ない。ただこの問題は，別の角度から見る必要があると私は感じています。その一つには，学校教員にダンスを学んできていないという学生が多いということです。つまり私教育，スタジオなどでダンスを学んできている。もう一つは，学校教育における舞踊が，舞踊芸術の現在とかけ離れているということ。つまり，現代のコンテンポラリーダンスの考え方，その可能性と，学校のダンスってものが今，少し離れてしまっているのじゃないかという側面。そのため舞踊芸術普及のためには，教職とは別の道が，より現実的だと感じる学生がいるのかもしれません。

最後に，本学のディプロマポリシーは要旨にのせましたとおり，「舞踊やスポーツといった人間の表現行動を理論的に分析する能力，およびこれを実演・適用できる」人材の輩出にあります。大学全体のミッション「グローバル女性リーダーの輩出」と合わせると，「大学における舞踊教育を通して，グローバル女性リーダーを輩出する」という教養大学型ミッションということになるのかなと今は考えております。ありがとうございました。

「筑波大学舞踊研究室では」

筑波大学　寺山　由美

プロフィール

筑波大学体育専門学群卒業後，筑波大学大学院体育学研究科を修了。専門は，舞踊論・舞踊教育学。現在は特に，「表現運動・ダンス」領域の学習内容の研究を進めている。目白大学人文学部助手，千葉大学教育学部講師・助教授を経て，現職となる。公益社団法人日本女子体育連盟常務理事，舞踊学会理事等を務める。筑波大学ダンス部顧問。

＜担当科目＞

学部：舞踊論演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」「種目別コーチング演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」「基礎理論・実技ダンス」「身体表現論」「学校体育実技」

大学院：「舞踊論演習Ⅰ・Ⅱ」「身体表現論」「舞踊授業指導論」「舞踊指導総合演習」「生涯スポーツのトータルマネジメント」「コーチング学事例研究法」。

発表趣旨

筑波大学舞踊研究室は，東京教育大学時代より舞踊教育のメッカとして多くの舞踊関係者を輩出してきた。東京教育大学まで遡れば，松本千代栄先生が舞踊研究室の設立にご尽力され，筑波大学になってからは川口千代先生，若松美黄先生，頭川昭子先生，村田芳子先生が教鞭を執られた。現在は，平山素子先生と寺山の２名で研究室を経営している。

筑波大学の場合，体育系の中に舞踊研究室が存在している。親学問として体育学が基盤になっていることは否めない。その意味では，体育教員を輩出することを想定したカリキュラムの中に舞踊関連の授業が存在する。近年は体育教員の輩出を第一義とはしていない傾向もあるが，体育系としては，スポーツ・体育の実践者・

専門家・研究者・指導者等を育成することを目的にカリキュラムが組まれている。

入試は推薦入試，一般入試，AC入試の三種類ある。舞踊を専門に入学できる学生は，推薦入試２名のみであり，その他の入試で何名入学するかは年によって異なる。その他の入試では誰も合格しない年もある。ちなみに今年度の１年生は２名が一般入試で入学した。平均すると舞踊で入学する学生は４名である。体育系には舞踊研究室の他に36の研究室がある。舞踊専攻生は，多くの場合は舞踊研究室に所属するが，応用解剖研究室や体力増進研究室などその他の研究室に所属する学生もいる。舞踊で入学した学生のほとんどがダンス部に所属する。筑波大学は実技の授業が少なく，学生は部活動で実技を行うことが主となる。舞踊を専門にする学生も同じである。授業としては舞踊関連のものも少ない。

個人的には，筑波大学舞踊研究室では指導者を輩出することが責務であると考えている。体育教員，大学教員，民間のダンス教室指導者と場所は様々であるが，他者を指導する立場になる卒業生が多い。学部時のダンスの授業は体育系の学生60名程度で行うこととなる。このように舞踊専門ではない体育系の学生とのダンス授業を通して，他者を指導する実践を繰り返し，ダンスを他者へ伝えることを学んでいる。

【当日の発表】

筑波大学の舞踊カリキュラムについて

寺山由美

筑波大学の寺山と申します。よろしくお願いいたします。筑波には，私は2006年の９月に着任し，その時には村田先生とご一緒させていただいていました。

まず，筑波大学は日本で最初に師範学校ということで設立された，東京師範学校を前身としています。その後，東京教育大学となり，1973年に今の筑波の研究学園都市に，筑波大学として移転したという経緯があります。ゆえに，師範学校の伝統を引き継いで，教員を輩出するという使命をずっと担っていたと，皆さん自覚していたと思います。しかし近年は，そうでもなくなってきました。

私たちが所属する体育系は，筑波大学で人文系，医学系など全部で10個の系があり，その中の一つになります。体育系は，体育，スポーツ，健康について，自然科学から，人文社会科学に及ぶ広範な分野と連携し，総合的に教育研究を推進する教育組織で，130名程の先生がいらっしゃいます。そして，学士，修士，博士という課程で成り立っています。

約140年の伝統を持つ体育専門学群は，体育，スポーツ，健康という３つの分野で，リーダーの養成に努めています。修士レベルでは３つの専攻と２つの学位プログラムがあり，博士レベルでは５つの専攻と１つの学位プログラム，その中の２つは英語のプログラムです。現在，外国からの学生さんも沢山在籍している状況で，グローバル人材の養成をかなり期待されています。これは，系長の言葉を引きました。

体育専門学群は，体育分野におけるリーダーの養成を使命として，社会に果たさなければならない責任である，と学群長も言っています。舞踊研究室は，この傘下にありますので，ここが根本となる考え方になるし，研究の場面では，どうしても体育学を基盤にして，ものを考えていくということが多くなる傾向があります。

筑波大学の舞踊研究室は，体育系に39ある研究室の一つです。体育スポーツ哲学，体育史，スポーツ社会学，体育科教育のような体育学をベースにしたもの，健康教育学，健康保健学，運動生理学のような健康科学をベースにしたもの，バレーボールコーチング論，陸上競技コーチング論のように，運動種目のコーチングをベースにしたものの３つの種類があり，全部で39研究室となります。その中に舞踊論として舞踊研究室があるというのが実態です。

今までの歴代の先生方は，まず松本千代栄先生が東京教育大学の時に，先生の教授昇任とともにこの舞踊研究室を設立創始して下さいました。その後，筑波に移転してからは，川口先生，若松先生，頭川先生という３名の先生で，経営していただきました。その後，川口先生，若松先生がご退職されまして，村田先生，それからダンサーの平山素子先生が着任され，私は頭川先生の後任として着任しました。なので，私が来たときには，やはり３名体制で行っていましたが，先ほど，村田先生もおっしゃっていましたけど，３年前，先生がご退職された時には，補充人事はなく，２名体制になっています。これは，舞踊研だけではなくて，どこの研究室も同様であり，どれだけ人員を削減するのかわかりませんが，とりあえず５年は凍結と言われています。５年後に，もしかしたら，３人目を採れるんじゃないかと，希望を持って挑んでいるところです。なので，３名で行っていたものが２名ということで，いろいろと手薄であるのは否めないなというのが現状です。

舞踊研究室の学生は，体育専門学群，いわゆる学群生と，それから大学院前期修士課程の学生と，それから大学院後期博士課程の学生がいます。村田先生がいらっしゃった頃は，大学院の修士課程に舞踊コースという舞踊単独のコースがあって，学内外から入学する舞踊専攻生が増えたり，多様な舞踊の授業を展開できたり，非常勤の先生をお呼びしたりということができましたが，その構成が縮小され，現在舞踊コースはなく，コーチング分野の一研究領域になっています。その頃と比較

すると大学院の舞踊の授業は減っている状態です。

筑波の卒業生で頑張ってる子も多いので，舞踊専攻生の人数がとても多いように思われますが，実はそうでもありません。入試は３種類あります。まず推薦入試，これは実技の成績で入ってくる学生で，年間２名入学することができます。次に一般入試，これはセンター入試を受けるいわゆる２月の一般入試です。これは点数順になります。センターと実技との総点で，上から採っていきますので，10人っていうこともなくはないわけです。逆に，０人ということもあります。最後はAC入試，他大学だとAO入試が多いのかもしれませんが，学群全体で８人ぐらいしか合格しない特別な入試です。狭き門なのでゼロ，もしくは，いたとしても１名という状況です。

この３つの入試を経て，舞踊専門として，入学してくる学生が，大体，過去10年だと年に4.3名で，ほぼ４人です。体育専門学群は，一学年240人定員です。240分の４ぐらいが舞踊の子たち，ということになります。今年度の入学者は，推薦が２名，一般で２名受かりました。すごく少ないです。

研究室には３年生から所属するので，舞踊で入ってきても，どこの研究室に行くかは選べます。多くの学生は舞踊研究室に所属しますが，違う研究室に所属する学生もいます。

筑波大で舞踊を学ぼうとすると，授業とかダンス部ということになります。授業ですが，体育専門学群ですので，お茶大と同じく，専門基礎科目，専門科目などがあり124単位を取って卒業となります。その中で実技は，11単位しかありません。４年間で11単位です。ダンス以外の，いわゆる陸上競技とか，ハンドボールとかっていうのが７単位です。なので，ダンス関係は４単位しかないというところになります。これは，ダンスだけではく，他の種目の学生さんも一緒です。それから，舞踊関係の授業は，平山先生が体育センター（一般体育）の所属になっているので，４年生の卒研演習しか担当していただいていません。大学院は２人で担当しています。

こういうわけで，舞踊専攻生のみの授業は，誠に少ないというのが実情です。その中で，毎年２月に「卒業ダンス公演」というものをやっています。これは，舞踊専攻生の卒業公演というものが，私の学生の時からありましたけども，村田先生がいらっしゃって，舞踊専攻生だけでなく，体育系の多くの学生（約300人ほど）が出演するというような公演に変えられました。これは舞踊研究室主催で行うわけですが，各学年の作品を，１・２年生はダンス授業受講生，３・４年生は有志，そして院生まで出演するので，その学年の舞踊専攻生がリーダーとして機能している，というようなことになります。意外ですが，舞踊の学生は，舞踊をやってない人たちにうまく教えられないんですね。自分は踊れても，人には教えられなかったり，踊りってこういうもんだ，みたいな形で，相手のことを見ずに価値観を押し付けたりとか，いろんなことが起こります。ダンスを指導していくことを，ここで学んでいるような状況もあります。公演の全てを学生がマネジメントしますので，特に体育の学生は，部活後とかにダンス場に集まって練習したりと，なかなか手間ですが，それも含めて，勉強させてもらってるな，というところがあります。また，舞踊専門以外の人たちに，ダンスの魅力を知ってもらっています。筑波の学生さんたちは，スポーツ・体育のリーダーになる人たちも多いので，その人たちにダンスってこういう特性だとか，楽しいなとか，価値があるなと思って卒業してもらうのは，すごくいいことだと思っています。

それともう一つ，ダンス部ですが，課外活動ですので，強制ではありません。体育学部なので，特有の部活動のありようという文化はあります。他の種目の学生も同じですが，実技の授業が少ないので，部活動で実技力を磨くのが，暗黙の了解になっているところがあります。今年のダンス部には，体育学部だけでなく，他学部の学生も入部しています。今年は23名中９名がそうです。入学してくる学生は，それぞれの経歴で，バレエ，現代舞踊，学校のダンス部，新体操などをベースに入部して来ます。創作を通して，舞踊というものを学ばせている状態です。平山先生が，いろいろなダンサーを呼んでワークショップをしてくれたりしています。

体育専門学群の学生は，進学する子が25％です。企業にいく子が59％で，教員が９％ぐらいです。舞踊の学生は，学群から大学院に進学が43％です。食べられるかどうかはともかく，ダンサーみたいになる学生も35％ぐらいいます。修士になると，46％が大学教員になります。それと，31％が中高の教員です。その他，就職，ダンサーとなります。博士課程に進学した人は，全員修了したわけではありませんが，100％大学教員になっています。そういう意味では，課程で求められていることが異なる状況です。

最後に，個人的な見解としては，指導者の育成をメインに思っています。それが，学校の教員だったり，民間のダンス教室だったり，それから，お稽古場だったりと場はいろいろですが，たとえその子がダンサーになったとしても，いずれは他者に教えるような立場になるということが想定できますので，コーチングや指導者を育成することに重きを置いています。村田先生が，「ダンスを踊れて，語れて，指導できる人」というキャッチコピーを置いていって下さいましたが，これを今も

踏襲しているというのが実情です。あとは，国立大学の舞踊の先生方が減少しているので，この出口も減っていくと思いますし，教育の文化みたいなものも変わっていくということが考えられるので，そこが懸案かなと思います。

東京女子体育大学 体育学部のカリキュラムにおける舞踊（ダンス）の位置づけ

東京女子体育大学　奥野　知加

プロフィール

1977年東京女子体育大学 ダンス研究室に助手として配属，現在（教授）に至る。ダンス部部長。
東京女子体育大学で「体育学士」，東京学芸大学で「教育学修士」を修める。
専門領域と研究分野は，舞踊教育，創作ダンス，藤村トヨの姿勢教育仕舞。
＜担当科目＞
「藤村トヨの教育」「ダンスⅡab」「舞踊教育論及び実習」「ダンス指導法及び実習ab」「体育ダンス」「ゼミ・卒業研究」。

発表趣旨

本学は「体育学部 体育学科」のみの単科大学であり，大学の主眼は「あらゆる年代の幅広い体育・スポーツに関わる指導者を育成すること」に置かれ，現行カリキュラムはこの目的に向かって１年次から順次積み上げる形で編まれている。大まかな課程は，１．２年次に教養科目や基礎理論と基礎実技を履修し，３．４年次は専攻コース（「コーチング学専攻コース」「体育学専攻コース」「スポーツ健康学専攻コース」）を選択し，専攻理論と演習や実習，ゼミ・卒業研究を履修するようになっている。また，中学・高等学校の教員免許（保健体育）は，どのコースを選択しても取得できるように組まれている。

本学における舞踊（ダンス）は，１．２年次の教養，基礎理論と実技（必修）を踏まえ，３．４年次の選択専攻コースで「体育学専攻コース」に位置づけられている。この「体育学専攻コース」は，体育という身体活動を通しての教育について学ぶことで，社会体育や学校体育における指導者の養成を目指すものである。本コース３．４年同次開講の「各種指導方法及び実習」に，「ダンス指導方法及び実習ab」を置き，ここで，学校体育はじめ社会体育など幅広い層に対するダンスの指導方法を実践的に学び，ダンスの指導力を身に付けることを目指している。

また，本学の舞踊（ダンス）は，本学独自の伝統的な舞踊（ダンス）に由来する理論と技法を１年次の教養や基礎実技に採り入れているという特色を持っている。本学は，明治35（1902）年，高橋忠次郎（日本遊戯調査会）らが，女子の教養として遊戯，体育を学ぶ専門学校「私立東京女子体操学校」（５月），「私立東京女子体操音楽学校」（11月）を設立したことが端緒である。その後の指導者，藤村トヨ（明治41（1908）年 校長就任）と，伊澤エイ（昭和30（1955）年 学長就任）両女史によるダンスの理論と身体づくりは，現行カリキュラムの教養や基礎実技（必修）にも含まれ，実施している。

以上が，本学のカリキュラムにおける舞踊（ダンス）の位置づけと目的である。現カリキュラムの問題点のひとつは，幅広い年代における舞踊（ダンス）の指導者養成を謳いながら，内容が学校体育に偏重していること。もう一つは，専攻コース履修者数に対応できる施設と指導者の不足ということが挙げられる。

【当日の発表】

東京女子体育大学の舞踊カリキュラムについて

奥野知加

皆さん，こんにちは。本学に40年在職しております。奥野と申します。前に発表された２つの大学とは，大学の規模も内容も違い，目指しているところも違いますので，多くの先生方には分りづらい部分もあるかと思います。本学は，女子のみの体育大学，そして体育学部・体育学科，単科の小規模大学でございます。それでは本学のカリキュラムの現状についてお話をさせていただきます。

本学の現行カリキュラムのねらいは，シートの右端「あらゆる年代の，幅広い体育スポーツ教育に関わる指導者を養成する」これでございます。これを目指して１年次から４年次へと積み上げ型で，カリキュラムは編まれています。平成27年度より実施し，今年度が完成年度でございます。

チャートに沿ってご説明しますと，大学１年次と２年次で，体育大学としての基礎・基本の理論と実技をほぼ必修で，１日４限までの時間割で取り組みます。２年間の基礎実技・理論と並行して教養科目も選択していきます。

３年次で，３種の専門コースに分かれます。「コーチング学」･「体育学」･「スポーツ健康学」です。学生は，スポーツ・体育分野のなかの専門領域を選択していきます。

「コーチング学」というのは，アスリートとしての自身の技能の向上や，コーチング指導の力を高めていくというコースです。「体育学」というのは，いわゆる体育，身体活動を通しての教育について学び，それを生かして種目の特性を踏まえた指導方法を身に付けていくコースです。三つ目の「スポーツ健康学」というのは，健康教育について科学的に学び，それらを運動指導や処方として指導できる指導者を目指すというコースです。学生は，それぞれのコース選択に相応しいゼミナールを選択し，３年４年と専門的に進んでい

きます。その間，教職（教員免許）を希望する学生（約80％が希望します）は，教職科目も合わせて履修します。どのコースを選んでも，教職（教員免許）は取得できる仕組みになっております。

このカリキュラムの構成は，現在の体育学会の学問領域を踏まえており，細部は，「体育スポーツ学分野の教育の質保証」(2011年）の「参照基準」を参考に編纂しております。現在のところ「人類学」以外は，揃えられております。

本学の現行カリキュラムの特色は，運動学を，身体論（哲学）を含めて重点化し，カリキュラムの強みとしているところです。そして，124単位プラス教職課程を単位取得して卒業していくというのが一般的な学生の全体像です。

こちらのシートは，本学でダンスを志向する学生が，どのようなダンス系科目の履修をして学次を進めるのか，お示ししたものです。入学時に初年次導入教育として「体育ダンス」というのがあります。「体育ダンス」は，本学伝統のダンスです。初年次導入教育として全員必修で行います。また１年次には，「ダンスⅠa・b」を必修で履修します。この「ダンスⅠa・b」を踏まえ，その発展型として「ダンスⅡa・b」を，これは選択ですが，ほとんどの２年生が履修します。「ダンスⅡa・b」は学校教育の体育領域のダンスを実践的に学習します。３年次では，先ほどの３つのコースに分かれますが，ダンスは「体育学」専攻コースに置かれていますので，「体育学」を選択します。このコースでは，「ダンス指導方法および実習a・b 」を履修し，ダンスの指導法について学習していきます。３，４年の２年間で履修し，同時に右上の選択領域からダンスを志向する学生は，「舞踊教育論および実習」や，「音楽効果論および実習」，「クラシックバレエ含む民族舞踊」や「ストリートダンス含むコンテンポラリーダンス」，「民族舞踊含む体育ダンス」等，40科目程の選択科目から30単位以上を取得します。そして同時に３・４年ではダンス系ゼミ及び卒業研究を必修で履修します。以上が大まかなダンス系科目の履修モデルです。

科目の内容を詳しく説明しますと，先ず１年次の「体育ダンス」ですが，これは「藤村トヨの教育」という初年次導入教育の一環で体験学習をします。本学は1902年に創設され，実質的な創設者が藤村トヨですが，トヨの教育理念を学ぶというのが，この「藤村トヨの教育」（初年次導入教育）です。内容は「体育ダンス」以外に「本学の建学の精神」，「学園の沿革」，トヨの教育実践のうちから「なぎなた」，「坐禅」，「豆嚢体操」で，これらは実際に当時のものを実施いたします。豆嚢というのは，小豆一合を袋に入れた，このようなものです。明治期，女子に相応しい軽体操として実施していたもので，豆嚢を振ったり投げたり，交換したりしますが，豆嚢が思わぬ方向に飛んだりするので，今の学生は面白がって楽しんでやっています。その外「集団行動」や「校歌の時間」，藤村トヨの主たる研鑽である「姿勢教育」や曹洞宗の禅を教育に取り入れた「トヨの教育と禅」などを学びます。

「体育ダンス」では昭和初期の『花のワルツ』というダンスを踊ります。その動画をご覧下さい。全員ドレスを着てお花を持って，このようなダンスを踊ります。

１年次は，その外「ダンスⅠa・b」で，ダンスの基本の運動や，本学伝統の既成の作品を学びます。これらは，藤村トヨ，伊澤エイの考案によるもので，伊澤エイは藤村トヨの実の妹です。２人が本学のダンスの基本と既成の作品を創りましたが，その下地になっているのが，高橋忠次郎（本学の創設者のひとり）の遊戯や坪井玄道の普通体操です。藤村トヨは，坪井玄道の普通体操を一貫して奨励し，スウェーデン体操には批判的でした。藤村トヨと伊澤エイは，昭和２年・３年・４年と，ドイツに研修に行きまして，そこで，ドロテヤシュミットやカールマイエルやボーデ，メリー・ヴィグマンらの直接指導を受けて帰国します。特にボーデの律動運動の理念と実践に賛同し，帰国後，伊澤エイは「ダンスの基本運動」を紹介しています（昭和６年頃より，当時はダンスの基礎訓練と呼んでいた）。「ダンスの基本運動」のねらいは，楽しくダンスを踊るために先ず，リズムの理解をする。そして体の中心と四肢の調和的な動きを目指す。それから身体の機能に合理的な動きや，動きの経済性を考えた動きができる，ということがこの「ダンスの基本運動」のねらいでした。これらは，ボーデの律動運動を参考にしながらも，当時の日本人の体格や動き方を考え合わせて考案されたものだといわれています。それを踏まえて伊澤エイは更に，既成の楽曲に振り付け，創作をした既成のダンスを200余も創作しています。それをこの「ダンスⅠa」で全学生が踊り体験的に学びます。それ以外に，「ダンスⅠb」では，「現代的なリズムのダンス」，「創作ダンス」や「フォークダンス」の学校教育におけるダンスの内容を実践的に学習します。

ここで「ダンスの基本運動」をご紹介したいと思います。映像をご覧下さい。

これは「弾む運動」です。ダンス部員が踊っていますので，授業ではこんなにスムーズには，実施できていませんが，基本の運動では，この弾みを非常に大事にしています。それから，「緊張と解緊」といいまして，力を入れる・抜くがスムーズに出来るように「緊張と解緊」の動きを練習します。それから，「重心移動」といって，重心の移動が適切に滑らかに出来ないと踊れませんので，

これを練習します。これらは現代の曲に合わせて動いていますが，当時は指導の先生がピアノを弾いて実施していました。また「振動運動」というのは，腕や足の力を抜いて振る，力を抜くことで大きな動きが生まれるという，運動の経済性に基づいた動きを練習します。既成の作品ではこの振動が多用されています。それからこれは「蛇動」といって，関節を滑らかに使った動きが出来るよう練習します。以上のような基本の動きを授業で実施しています。

既成の作品は『小鳥と青空』というダンスを踊っています。これは基本の運動が網羅された，リズミカルに楽しく踊れる作品なので，基本の運動のまとめとした教材として，教えています。

次に２年次に参ります。ここでダンスを志向する学生は，「ダンスⅡa・b」を選択します。ダンスⅡはダンスⅠを履修済みであることが選択の条件です。ダンスⅡでは学校教育の体育のダンス領域を学習します。「ダンスⅡa」では，「現代的なリズムのダンス」を，「ダンスⅡb」では「創作ダンス」，「フォークダンス」は両方で学習します。何れも専任教員が担当します。これは今週の火曜日の私担当の授業風景で「現代的なリズムのダンス」の様子です。このように履修する学生がすごく多いので苦労しています。この学生達はEXILEをきめて踊っているつもりだと思いますが……？

その下は，リズムの理解の場面で，動きのリズムを分解してみたらどうか？という課題に取り組んでいるところです。動きを手拍子で打ってリズム譜に起こして，リズムの確認をしているところです。

３年次になりましたら，専攻コースになります。「体育学」専攻コースにダンスが置かれ，ダンスは指導法に変わっていきます。指導法のa・bとして，学校教育の体育授業のダンスの指導法を学びます。aは，「創作ダンス」，bは「フォークダンス」，「現代的なリズムのダンス」はab両方に位置づけしています。これらも専任教員が担当しています。何れも模擬授業を中心に学習していきます。これは昨日の私担当の授業の様子です。「創作ダンス」の模擬授業で，教師役が前で説明をして，グループ活動をこのようにして，発表をし，発表を終えて省察をしていくという内容の授業でした。また３年次では，その外に，このような選択科目を選択し，ゼミナールを必修で履修します。選択科目の「体育ダンス」を動画でご紹介します。これは，伊澤エイの晩年の作品です。体育ダンスの授業が後期なので，これはダンス部の学生が発表会で踊ったものです。このような本学の伝統のダンスを学習することによって，音楽の情緒を味わいながらリズミカルに動くことが出来るようになります。このダンスの動きの技能の獲得を目指すなかで，学習者は，ダンス的な動きがもつ情緒を感知・感得することが出来ます。そしてこの様な活動は，学習者の豊かな情操を育むことにもつなげていくことが出来るでしょう。これがこの学習のねらいでございます。

本学でダンスを志向する学生にとっての現行カリキュラムの問題点としては，カリキュラムが「幅広い年代を対象とした指導者の養成」を謳っているにもかかわらず，学校教育の体育のなかでも，ダンス授業の指導法と指導者養成に限定されているところに，目的との齟齬があると考えます。現代の学校教育におけるダンス活動は，ストリートダンスやチアリーディング等々，ダンスの種類や内容も多様化しています。それらに対応できるような指導者の育成が必要ではないかと考えます。

もうひとつは，ダンスを学びたい学生，つまり「体育学」専攻コースの履修者が，先ほどお見せしたように多いので，施設や指導者の不足の問題，これが現実的には喫緊の問題でございます。

以上が本学の現行カリキュラムにおける課題としてあげられる事柄です。

このシートは本学の建学の精神で，「心身共に健全で質素で誠実，礼儀正しい女子体育指導者の養成」という，創設以来のモットーでございます。長くなりまして，失礼致しました。

「日本女子体育大学の場合」

日本女子体育大学　松澤　慶信

プロフィール

1983年慶應義塾大学法学部法律学科 卒業（法学士），1986年慶應義塾大学文学部哲学科美学美術史学専攻卒業（哲学士），1989年慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程修了（哲学修士），1993年3月まで ロンドン・ラバン・センター留学。

2002年～ 日本女子体育大学体育学部運動科学科舞踊学専攻および大学院 准教授，2011年～ 日本女子体育大学舞踊学専攻および大学院教授。

＜担当科目＞

学部：「舞踊美学」「舞踊分析法」「舞踊分析法演習」「舞台芸術論」「舞踊創作原論」「舞台演出論」「舞踊史学」。

大学院：「舞踊演出法特講」「比較舞踊学特講」「舞踊学特演」。

発表趣旨

来年度から日本女子体育大学では体育学部ダンス学科となり，日本で初めてダンスの学位が認められて学生はダンス学士を得ます。ダンス学科という名称の成立，そしてその名称にともなう意味と利点さらに問題点，

それにともなう本学のカリキュラム構成について話します。

ダンス学科を広義あるいはトータル概念としての舞踊教育と考えて，体育学を基礎として，芸術系，教育系のカリキュラムを組んでいます。また実技，座学，その両方を兼ね備えた演習という３つの授業形態を構成しています。

芸術系のカリキュラムとしては，バレエをベーシックテクニックとして，モダンダンス，コンテンポラリーダンス，ジャズダンスのテクニック習得，他にスペイン舞踊，日本舞踊，タップダンス等を学び，そして創作，インプロヴィゼーションに重きを置いて，卒業公演や３年生パフォーマンス等の発表の場を設けています。他にヴォイストレーニングの授業，舞台技術として照明，音響操作の基本，メディアを駆使して編集をする授業などもあります。講師として，毎年代わりに著名な振付家やダンサーにお願いする授業もあります。

座学としては，舞踊美学，舞踊史学，舞踊分析，舞台演出論，比較舞踊学，舞踊音楽論，制作論などがあり，舞踊言語の特性の確認と，それが作品を作る上での指針となることを意識して組まれてもいます。

教育系としては，中学高校の教員免許習得を目指して，学校ダンス，フォークダンスなどの教育舞踊を中心に組まれていますが，幼児，老年，障害のある方にダンスがどのように有効か，またセラピーを通したダンスの応用に取り組む内容を展開しています。

体育系として，運動学や解剖学，生理学，テーピング論，栄養学を踏まえて身体の機能を学びますが，これらがダンス教育にとっても有効であること，そしてこれらの習得が，本学が体育学部にあることの優位だと考えています。ダンス教師になったときに，それらが即戦力として役立つことがままあるからです。

これらを単位として履修するためには，１年生から３年生までほぼ朝から夕方までの時間が必要で，いわばダンス三昧ですが，その上に部活動が盛んで，モダンダンス部，舞踊部，ソングリーディング部，そしてダンス・プロデュース研究部などがあり，後者はとりわけ地域との交流を目指すコミュニティダンスも目指して，大学授業では足りない側面を補充しています。

卒業生はダンス界の様々な分野に繰り出して活躍しています。

まさに体育学のもとに，Dance for Allを目指しているといえるでしょう。

【当日の発表】

日本女子体育大学の舞踊カリキュラムについて

松澤慶信

日本女子体育大学の松澤です。来年の2020年度から，日本女子体育大学体育学部ダンス学科になりますが，そのためにはいろいろありました。その名称に関して，なぜ舞踊学科では駄目だったのか。芸術系ならばいいが，教育系・体育系の大学ですからと文科省からの指導がありました。それでこの話は８年ほど前からすでに動いていたのですが，舞踊学科という名称では駄目と言われて，では体育学部の中で舞踊運動学科というのを考えて，それでいこうかと考えていたのですが，その後４年たったら，ありがたいことに，中学校のダンスが必修になったものですから，文科省側からダンス学科はどうですかと提案されたらしく，ではそれでいきましょうと，私たちは決めた次第です。

在学生に話すと，ダンス学科ってと首をかしげるんです。だから，これからの日女のダンス学科が良いか悪いかは，この名称がアップするかどうかは，あなたたちのこれからの活躍次第だよ，と話しています。

ダンス学科の強みは何か。学士号，bachelor of danceが出るんですね，これは日本で初めてです。受験生はダンス学士になって何がいいんだって思うかもしれないけど，入募対策としては，ダンス学士になれることのメリットは，海外に行く時に，今までは本学は体育学士が出たんですが（芸術学士でもなく），しかしこれでbachelor of danceが出るので，とてもありがたいことなんだよと言います。

でもやはり高校生にはあまり関係がないから，本学の売りはとにかく何かと聞かれたら，今はちょうどNHKの大河ドラマの『いだてん』に出たことと言いますね（土屋太鳳も実質歩く看板塔ですが）。ちょうど今さっき電話してたら，「先週見たよ。松澤先生，あなたの大学でしょ」って言われたのには，ありがとうございますと応えました。創立1922年，大正11年ですね。2022年に，100周年やるそうで，準備しています。そういう大学です。それで余分な話ですが，さすがクドカン（脚本，宮藤官九郎）。トクヨ先生がかつらだというところもちらっと出ていましたが，しかし彼女は本当に進取の気性をもった懐のでかい人物だったらしく，強い怖い，でも偉大な人だったようです。

今は舞踊学専攻ですが，１学年100名で400名います。途中で辞める子がだいたい多い時で10名ほどでしょうか。まあ学生が400名で，教員が11名，実質ダンスに関わる先生が10名。実技系ではバレエが１人，コンテが３人，モダンダンス現舞が１人，ジャズダンスが１人です。ジャズダンスの専任がいるというのもすごい誇りですね。舞踊芸術教育系と，教育舞踊・ダンスエデュケーションの宮本先生がいて，セラピーとして八木先生，それから座学講義として森先生と私もいます。もう一人は英語の先生がおりますが，まあ舞踊系としては10名で400名を相手にしていますが，それは大変です。教員を増やしてほしいと大学側に言っていますが，増やしてくれません。まして，ダンス学科になっ

たら，この体制を４年間変えられないと言うんですが，こちらはもういっぱいいっぱいですね。

お配りしたプリント（本学の大学案内誌『WILL』の中の講義科目の一覧の箇所をコピー）をご覧下さい。本当にこれだけの授業を開講しているんですが，一応，舞踊学のカリキュラムとしては完成したものであると自負しています。一昨年はドイツから政府レヴェルでの舞踊教育の視察団，昨年は韓国の祥明大学から来学されたのですが，この充実したカリキュラムには驚かれていました。

私は実は「ダンスサイエンス」という科目をさらに作りたいのです。本学は体育学部ですから，運動学，解剖学，栄養学，生理学，医学，バイオメカニクスなどの専門の教員がいるので，オムニバス形式で，それらの学問対象にダンスを置いた，ダンスにサイエンティフィックにアプローチする授業を展開したいです。

先ほど触れました大学案内誌『WILL』というのがありますが，２年前のは表紙が土屋太鳳で，裏側がミスワールドの優勝者で，そこそこ出回ったらしいんですが，その『WILL』にデータが全部載っています。入試の倍率とか，就職率とかもです。各学年の学生の週の時間割例もあげられています。本学は朝から４限までしかなくて，１限，２限，３限，４限で授業を行なうんですが，これだけの授業を月曜日から金曜日の４限までで行うので，学生は４詰まりといって，ダンス三昧の学生生活を送っています。しかもさらに，教職を取る子は教職用の授業を５限に履修しますので，３年生までは本当にほとんど大学で時間を埋めるんですね。余分なことを言いますが，彼氏ができても，半年くらいで別れることになるんですが，なぜかと言えば，学生はこのように大学生活で忙しいので，彼氏が，俺を取るか，ダンスを取るかって聞くと，本学学生はもちろん間違いなく，ダンスと言うかららしいです。それくらいにダンスに浸かっているというか，浸かれるんです。

お勉強的なことを述べます。1988年に英国でEducation Reform Act of 1988 in UKという戦後二度目の大きな教育改革が行われたときに，ダンスの位置づけを，芸術の領域（ダンスアーティストの養成というpracticalな意味）に置くのか，体育領域か，はたまた教育領域に置くのかという問題が浮上したときに，結局，dance for all の考え方に立ち，ダンスこそは領域をクロスオーバーする好例と考えられ，ダンスを習得することを目的にしたダンスアーティストの側面と，全人的教育を行う際にダンスというツールを通して実践するという両側面とで，ダンスを考えようと落ち着いたのでした。そしてこれらの各教育機関がどちらの方向性を持って運営していくかは各自にまかせたのでしたが，この姿勢はヨーロッパ全土にも普及しました。しかしドイツではかえって体育スポーツ系のダンスと芸術系のダンスとがあきらかに分離した教育実践が行われるようになっています。

しかし，本学はこの両者をともに実践している大学であり，体育学部の中にダンス学科を置くことで，体育としての，教育としての，そして芸術としてのダンスを標榜しています。

それで，まず芸術系の授業に関してですが，お手元の配付資料をご覧いただければわかりますが，ベーシックテクニックとしてバレエは必修ですし，コンテ，モダンもやって，あとジャズダンスも履修しなければなりません。要するに，テクニック系をまずがっちりとって，他に，スペイン舞踊や，日舞もあったりします。エアロビなんかもあったりします。創作系として創作の授業にインプロもあります。テクニックレパートリーという科目もあり，本当にいろいろなダンスジャンルとそのそれぞれの取り組み方にヴァラエティを持たせています。３年生になると研究室を学生が選びますが，そこで各先生が自分のジャンルにそって濃密な授業を行います。他には，メディア系として，メディアを使う実践的な授業もあります。米津玄師の『Lemon』に出演，実は振付もしているのは卒業生で，この間，朝日新聞にも載った，NTTの問題で表現を改変させられたって怒って書いた子ですが，彼女はカンヌの国際映画祭のショートフィルム部門にも招待された自慢の子で，東京芸術大学大学院に行った子で，こういう展開をする学生も輩出しています。日本の現在の主だったコンテンポラリーダンスのグループには卒業生がいますが，劇団四季に行ったりする者もいます。何年か前は，ディズニーランドのようなテーマパークで，６回石を投げれば１回は卒業生に当たると言われましたが，いっぱいいます。

卒業後の進路について話が広がっていますが，教育系として言えば，教員免許が取れますので，卒業後は中学高校の教員，しかも専任よりも非常勤にのぞんでなります。何とか自分の時間が持てて，ダンスが続けられるからです。それと，体育系の授業がありますから，それこそテーピングとかも学んだりします。それで実はこのことが卒業後にお稽古場の先生になった時に，そこの生徒が怪我したら，その場でテーピングをしてあげられるわけです。これはありがたいことで，昔，大学のある千歳烏山駅のファーストキッチンで，心臓麻痺を起こしたおばあちゃんを，舞踊の学生がその場で心臓の蘇生をやって，東京都から賞をいただいたというのがありましたが，体育の授業も学べるというのが，ダンス教師にとって実践的にもとても有利だと思います。

ダンスも出来て，そういう諸々のことに対処できますというのが，本学の売りです。話をカリキュラム内容に戻します。ダンスカレントというのがあって，舞台技術の基本も学べます。本学には300名収容の客席を出せるホールがありますから，灯体をいじったり，音響をオペしたりして，ここで打つ公演は自主運営しています。もちろん舞台技術の基礎中の基礎ですが，しかしそういうことを実践すると，舞台に立ったときに，照明が自分の身体のどこにどうやって当たるかということがわかるので，それは舞台人としては大きいことです。ですからそろそろ，そっち方面に行く子もいれば，マネジメント，あるいは衣装方面に行く子も出てきました。ワークショップも年何回か授業とは別に組まれていて，来日したアーティストに頼んで開講してもらいます。フォーサイスやドゥクフレも来ました。今度はNDTのダンサーを呼びます。それから毎年講師が替わる正規の授業があって，今年度は中村恩恵さんに来ていただきます。平山素子先生も，木佐貫先生も来られました。

最後に話したいのは部活動についてですね。部活動が盛んで，伝統のモダンダンス部があり，舞踊部があり，またダンス・プロデュース研究部（www.danprs.jp ここでフォーサイス公認の彼のレパートリーのメイキングが見られます）は，授業カリキュラムでは足りないことを，例えばコミュニティダンスなどを補っています。

また就職のことに触れますが，教員にはなれますが，やはりダンスのみで食べていくことは難しいです。それでもちろん一般就職組も大勢います。しかしこれは皆さんも同じだと思うのですが，例えば地方の銀行とかに行くと，ダンスを習ってきた子は評判がいいんです。なぜかというと，笑顔でにこっとして，エポールマンやったりして姿勢良く見せるので，銀行の就職のおじさんたちに評判が良いんです。そうです，これも，ダンスをやっている者の特権ですね。

あと大学院についても少々。本学は修士までなんですが，修士課程ができて25年経ちまして，本大学院の修了者は18名が大学の専任教員になっています。それははっきり言うと，東京女子体育大学の卒業生が来てくれて，その子たちが本当に優秀で，大学の教員になっていくからでもあります。

まとめましょう。要するにdance for allを目指してるんですが，多目的というのはえてして無目的になりますが，何とか，この多様性を生かしつつ，舞踊教育のデパートメント，あるいはグッドモデルになりたいという気概があります。そして，芸術ダンスとしても優秀な卒業生を輩出して，世界に羽ばたく逸材（ローザスの団員もいます）を出したいとも考えています。どうしても体育学部の中にあるので，この芸術系の側面が普通の人には見られないというのが唯一の弱点ですが，しかし本学は大いにその利点を生かした実績をアピールしていきたいです。

「様々な特徴を持つ大学の舞踊（ダンス）カリキュラムに関する調査報告」

聖心女子大学　朴　　京眞

プロフィール

2010年筑波大学大学院人間総合科学研究科博士前期課程体育学専攻修了，2013年筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程コーチング学専攻修了（博士「コーチング学」）。

2014年～ 筑波大学体育センター特任助教，2019年～聖心女子大学現代教養学部教育学科専任講師。

専門：体育科教育学，舞踊教育学。

＜担当科目＞

「教育学入門」「教育学演習」「体育科教育学」「体育運動学」「世界の身体表現文化」「生涯学習研究特論」「生涯学習研究演習」「生涯学習特殊研究」「生涯学習研究特殊演習」など。

発表趣旨

本発表では，日本の大学における舞踊（ダンス）カリキュラムについて，「教員養成課程」に位置づいているものと「舞踊（ダンス）専門課程」に位置づいているものを，大学のホームページに公開されている資料を中心に調査し，その特徴を報告する。

まず，「教員養成課程」における舞踊（ダンス）カリキュラムについては，2015年スポーツ教育学会で発表した「大学の教員養成課程におけるダンス授業の実態調査」を再報告する。この調査では，中学校・高等学校における「ダンス」領域を指導する際に必要な基礎的知識と指導方法を身に付けることを目標とするダンス授業に限定して調べた。調査結果，ホームページからシラバスの検索ができた160校の中で，136校（85%）においてダンス授業が開講されており，多くの学生たちにはダンスを経験し，その指導法を学べる機会が与えられているといえる。しかし，ダンス授業が必修となっている大学は24校（18%）のみであり，その他の大学では学生の選択次第でダンスの経験に差が生じることが推測された。また，ダンス授業の内容については，「創作ダンス」「現代的なリズムのダンス」「フォークダンス」の３つのダンスを均等に取り上げているとは言えず，「創作ダンス」中心の内容が多くみられた。さらに，「エアロビックスダンス」を「現代的なリズムのダンス」の代わりに取り上げていると推察される事例もみられた。

次に，「舞踊（ダンス）専門課程」における舞踊（ダンス）カリキュラムについては，「体育・スポーツ系大学」「女子・女子体育大学」「舞踊（ダンス）コースがある大学」の３つに分けてその特徴を検討した。その結果，「体育・スポーツ系大学」では，ダンス実技の授業とともに，「舞

踊論」「身体表現論」など，舞踊（ダンス）について理解を深めることができるように理論科目を提供している大学も見られたが，教職のためのダンス実技授業のみ提供している大学の方が多かった。「女子・女子体育大学」では，ダンス専門のコースがあり，様々な実技授業はもちろん，舞踊学理論科目の他に「舞踊音楽論」「舞踊創作法」「臨床舞踊論」など，舞踊を多方面から学び，研究することができるようにカリキュラムを提供していた。「舞踊（ダンス）コースがある大学」では，舞台表現学科，芸術文化学群，芸術学部演劇学科などに舞踊（ダンス）カリキュラムが位置付けられたおり，「舞台表現演習」「制作基礎」「シアターマネジメント」など，舞台芸術としての舞踊（ダンス）について実践的に学べる科目を多く提供するとともに，大学や学科の特色が反映された独自のカリキュラムを構築しようとする試みが窺えた。

【当日の発表】

全国調査から

朴　　京眞

聖心女子大学の朴です。よろしくお願いします。全国調査とはなっておりますが，全国を全て調べるのは難しかったので，その中で特徴がある大学を調べてきました。後半，出てくるんですけれども，インターネットのホームページに掲載されているものを参考にしておりますが，中に，既に早稲田大学から間違いが出てきて修正して持ってきたんですけれども。もし，間違いがあれば，先生方から教えていただければと思います。よろしくお願いします。

今日準備してきた内容としては，舞踊カリキュラム調査報告として，主に，教員養成課程に関するものと，舞踊ダンス専門課程に関するものの二つに分けて報告させていただきたいと思います。

まず，「大学教員養成課程におけるダンス授業の実態調査」なんですけれども，2014年のシラバスを参考に調査して，2015年スポーツ教育学会で報告させていただきました内容を，再度，短くまとめて持ってきました。

本研究の目的です。大学の教員養成課程におけるダンス授業について，2014年度シラバスの検討を通して，その実態を明らかにし，課題を導き出すということで，調査を行いました。研究方法になりますが，今回，調査対象として選んだ大学としては，文部科学省が公表した，教員免許状を取得できる大学リストがホームページから取得できまして，その中で，全ての大学（４年制大学）を調べました。調査方法は，こちらも，ホームページのシラバスを基に，調査を行ったのですけれども，対象としたダンス授業とは，中学校，高等学校におけるダンス領域を指導する際に必要な基礎的な知識と，指導方法を身に付けること，実技授業を主に対象として調査を行いました。リストに，166大学がありましたが，その中で，６大学はホームページから資料を調べることが難しかったので，160大学のシラバスを対象に検討しました。

ダンス授業が開講されている大学なんですが，ダンス授業がある大学は136校，ダンス授業がない学校24校です。パーセンテージからみると，ある大学は85パーセントでした。ここから，単純に考察していくと，大学の教員養成課程の，多くの学生には，ダンスを経験し，その指導方法を学べる機会が与えられているのではないか，と考えられます。大学は160校あったんですけれども，その中で検索できたダンス授業のシラバスの数は239件。その中で，ダンスの具体的な内容が分からなかったものは除いて202件のシラバスを検索して，調査を進めました。ダンス授業の対象学年としては，１，２，３年で，ほぼ一緒ぐらいの，55，52，54件で，４年生以上が取れる授業が３件ありました。

ダンス授業の単位数では，ほぼ１単位ということと，演習型が中にありまして，31件。あとは，一部のみもありましたが，１単位の場合は，12回から20回の実技授業。あとは，15回の授業に対して，もしくは30回以上の授業で演習科目は２単位。あとは，１単位から３単位の，複数の種目と一緒に，例えば，ダンスと柔道とか，器械体操とダンスとか，そういう形で，１～３単位を取得できるものがありました。

ダンス授業の履修方法では，必修は24件で，選択必修，選択は81件でした。こちらに関しては，記載なしが97件で，すごく多いです。シラバスの中で，全てが示されていなかったため，正確なデータとは言えないんですけれども，それが把握できるデータの中で考えていきますと，ダンス授業が必修の場合が，選択必修や選択に比べて少ない，ということで，ダンス授業が多く開講されているにもかかわらず，学生の選択次第で，経験に差が出てくるのではないかと考えられます。

次に，ダンス授業の内容をみていきました。創作ダンス，現代的なリズムのダンス，フォークダンス，の３つのダンスが全て示されている授業としては67件で，33パーセントでした。これは，私の予想よりは低い数値でありました。

ダンス授業の内容では，創作ダンスを主に取り上げている次に多かったのが，２つのダンスを取り上げている場合で，58件で28パーセントでした。現代的なリズムダンスと創作ダンスか，フォークダンスと創作ダンス，フォークダンスと現代的なリズムのダンスという順で，出てきました。一番多かったのは，現代的なリズムのダンスと創作ダンスの組み合わせであり，46件でした。この３つ

のダンス，プラス，エアロビックダンスという例示が多く見られ，24件でした。

これらから検討すべき課題として考えられるのが，一番最初に述べました，ダンスの授業自体がない大学が24大学あることが確認できました。５年前の資料なので，その後改善されたかもしれないですが，そのうち，３つの大学では，その県において，保健体育の免許取得が可能な唯一の大学であるにもかかわらず，ダンス授業が開講されてないことが確認されました。

あとは，３つのダンスのバランスについて，取り上げられているダンスに偏りがみられ，創作ダンスが多くて，フォークダンスの方は，比較的少ないということでした。あとは，各ダンスの特性や，指導内容に沿った授業内容とは，異なる事例も見られて，創作ダンスの方では，即興や作品創作の他に，具体的な内容として，振り起こしや既存の作品をやってみるっていう内容とか，現代的なリズムのダンスでは，ヒップホップの比重が多かったということですね。他の例示されているリズムより，ヒップホップ中心に，それだけをずっと取り上げている例示も見られました。

次に，ダンス専門のカリキュラムの方に移らせていただきたいと思います。

まず，体育スポーツ系大学と，女子大学，女子体育大学，あとは舞踊・ダンスコースのある大学，で分けてみました。下のほうが芸術のほうに近いかなと思います。こちらの大学に分けて見ていきたいと思います。もし，間違いがあったら，ぜひご指摘ください。先に発表をしていただいた先生方の四大学については簡単に進めさせていただきたいと思います。

最初，筑波大学です。ダンスの実技にプラス分野別専門課程で，身体表現論などが示されており，あとは実技系科目で，種目別コーチングにダンスが取り上げられています。前は比較舞踊論とかダンス特別実習（フォークダンス･社交ダンスなど）もあったと思いますが，縮小されている傾向がみられるのではないかと考えられます。次に，日本体育大学です。体育学部体育学科とスポーツ文化学部武道教育学科の両方で，ダンスに関する内容が示されております。体育学部では，実技のダンスなど，スポーツ文化学部のほうで，舞踊創作論，比較舞踊学などが示されていることが確認できました。

次は，大阪体育大学です。体育学部スポーツ教育学科で，ダンス実技と共に，舞踊論，コミュニティダンスなどを取り上げられていました。早稲田大学は，先ほど訂正したものなんですけれども，スポーツ科学部にスポーツ文化コースとスポーツコーチングコースが設置されており，その中で，スポーツ文化コースでは，舞踊文化論と，比較舞踊論など，あとは，スポーツコーチングコースの方では，スポーツ技術･戦術論とコーチング理論･実習でダンスが取り上げられており，演習科目は，ダンサー論（Ⅰ～Ⅳ）などがありました。

平成国際大学では，専門基礎過程でダンス（教職は必修）と，身体表現論（学部必修）として理論科目が開講され，天理大学でも，スポーツ方法のダンスと身体コミュニケーションという講義が開講されております。

これらをみると，体育スポーツ系の大学に関しては，他のカリキュラムとの関係があると思うんですけど，多くの舞踊，ダンス関連科目を提供することは難しいが，実技科目のダンスと共に，ダンス理論科目を提供している大学が多くみられています。今回，持ってきた例は，そういう大学ですけれども，しかし，他の多くの大学では，教員養成課程におけるダンス授業のみを提供していることが，今の現状ではないかと推察されます。

次に，女子体育大学ですけれども，日本女子体育大学は，先ほど具体的に説明していただいた通り，大変多くのダンス関連授業が開講されています。お茶の水女子大学でも，ダンス実技と共に，体育系の大学と比べて，多くのダンス関連授業が開講されていることが分かります。

これらからまとめてみると，女子大学，女子体育大学では体育学部または文教育学部の中に，舞踊ダンス，専門コースがあり，舞踊関連科目を提供したり，専門コースがない場合でも，他大学に比べて，舞踊関連科目を多く提供していました。さまざまな実技科目はもちろん，舞踊学原論をはじめ，学問分野の一つとして舞踊を多方面から学び，研究することができるように，カリキュラムを提供していると考えられます。

三つ目になりますが，舞踊・ダンスコースです。芸術系では，尚美学園大学で，2015年に新しくできたコースですが，舞台表現学科ダンスコースにおいて，舞踊表現基礎演習とか舞踊表現概論，舞台表現演習の方を，段階を踏んで進められるように，取り上げていることが特徴かなと思います。他に，桜美林大学では，こちらも芸術文化学群，演劇・ダンス専修なので，演劇と関連したものプラス，ダンスのクラシック，ダンスのコンテンポラリーの実技，日本舞踊などを取り上げたり，演出研究と演出芸術応用論など，演出に関する科目も多く取り上げておりました。次に，芦屋大学になりますが，臨床教育学部，教育学科のダンスコースが経営教育学部，経営教育学科バレエコースがありまして，ダンス関連の科目の中に，ヒップホップやロックの授業も多く，バレエコースに関しても，バレエの基礎からバレエテクニックなど，あと舞踊表現など，振り付けなどが学べるような科目を提供しておりました。次に，大阪芸術

大学ですけど，こちらは舞台芸術学科に，舞踊コースとして取り上げておりました。こちらの演出や舞台の芸術ということで，舞台に上げるような関連の科目が多く取り上げていることが分かります。舞台監督研究とか，演技演出論なども取り上げていることが特徴かなと思います。

続いて，日本大学ですけれども，こちらも演劇学科に，日舞コース，洋舞コースに分かれて，ほぼ同じ内容が取り上げられているのですけれども，日本舞踊演習と西洋舞踊演習だけが違って，専門とする実技の違うものを提供しているのではないかと思います。最後になりますが，近畿大学になります。こちらも文芸学部，芸術学科，舞台芸術専攻，舞踊創作系になっているのですけれども，舞台表現基礎実習など，舞台関連科目を多く提供しておりました。

これらをまとめますと，舞踊・ダンスコースのある大学では，舞台表現学科，芸術文化学群，芸術学部演劇学科などに，舞踊・ダンスカリキュラムが位置付けられており，舞台芸術としての舞踊・ダンスについて，実践的に学べる科目が，他の大学に比べて，多くみられたと思います。また，大学や学科の特色が反映されて，それに合った，独自のカリキュラムを構築していこうとする試みがみられたと思います。

最後に，まとめのスライドを説明させていただきます。大学におけるダンスの目的は，高等教育を大学で学ぶことになりますので，社会における舞踊ダンス文化をリードしていく重要な人材を育成する場だと考えられます。社会的にもダンス，舞踊に対する関心も高まっており，大学で舞踊，ダンスを学びたいと思う学生も増加しております。それを受けて，体育学科とか，芸術表現学科，舞台表現学科など，多様な学科が存在していますが，これからの課題として，舞踊・ダンスカリキュラムの核心的な内容を，どのように質を高めていくかを，考えていくべきではないかと考えました。以上です。ありがとうございました。

●討論

「大学における舞踊カリキュラムの現状とその可能性」

村田　これまで４つの大学の舞踊カリキュラムと全国調査の状況についての話題提供をしていただきました。５名のパネリストの先生方，貴重な資料とお話をありがとうございました。

では，ここからは，これらの話題提供を基にみなさんとともに意見交換してテーマを深めていきたいと思います。皆さんのお話を聞いていて，全体に共通するのは「舞踊で何を教えるのか，舞踊が大学の中でどのように存在するべきなのか」ということのように感じました，そのあたりを個別にお伺いしたいと思います。

まず，大学で学んだ舞踊カリキュラムがどういう形で卒業後に生かされていくのかということについて，福本先生に伺いたいと思います。あとフロアの方からも遠慮なく質問，意見等言っていただきたいと思います。

福本　私が先ほど「最終的に教養系という可能性があるな」と申し上げたのは，高等教育における舞踊教育が，一体，何を，どういう人材像を目指すのかを，広く考えてゆく方針をとるということです。舞踊だからこそ，総合的に伝えることができる，教育することができる側面っていうのは何なのかということを，実技の指導であれ，制作の指導であれ，舞踊理論の指導であれ，舞踊史の指導であれ，全てにおいて，それを想定するという心構えです。なので，卒業後に舞踊の専門家にならなかったとしても，実技のメカニクスであるとか，指導の哲学であるとか，そういうことを学生が舞踊に限らずあらゆる局面で生かせるものとして意識的に反映していくという意味で言いました。

村田　先ほど，一番最後に発表された朴先生が「なぜ大学でダンスを学び踊るのか」という核になることをきちっとしておく必要があると言われましたが，「それは何なのか」っていうことですよね。

福本　そうです。ただ，今の段階では，自分の個人的な志として考えているに過ぎませんが。

アメリカに『Dance 2050』っていう文書があり，2050年までに高等教育における舞踊教育をどういう状態にするか，皆のビジョンを集めたものです。そこには，どういう人材を生み出し，舞踊教育の価値とかはこういうところにあるのだという，共通の，そういう核となる価値観が出されているのですね。それはすごいなと思っています。つまり舞踊家を育てるというだけではなくて，舞踊家以外の人材輩出も含めて舞踊が高等教育で何ができるのかっていうことを，芸術系とか体育系とかの垣根を越えて話し合っていくことが，今後，必要なんじゃないかという気持ちもありました。

村田　寺山先生，何かありますか。

寺山　個人的には，舞踊を捉える時に，体育の中で考える舞踊というのと，芸術で考える舞踊というのが，私の中では別物だったりする時もあります。正直言うと。その曖昧な舞踊の捉え方の中で，今いるっていうのが現状です。体育というのも，結局，スポーツ文化とダンス文化と体操文化とを援用してくるわけですけど，スポーツにも光と影があります。やっぱりどうしても勝ちたいとなったら，薬を使ってでも勝ちたいってなるっていう側面はありますし，ダンスも本当はもっとセクシャルだったりしたりして，光と影があるけど

も，教育場面では，割と光の部分だけを援用して教材にしているのが実情だと思っています。そういうことから，ダンスを専門にする人，またはスポーツを専門にする人は，そういう文化なんだって知った上で，体育なり教育っていうものを考えてほしいなとは思います。学生には，ただ技術を教えればいいとか，ただスポーツをやらせればいい，ダンスを教えればいい，踊らせればいいっていうことではなく，その背後に潜む文化性というものも含めて，伝えたいなっていうのはあります。

研究領域になると，白黒はっきり，本当は領域を区切っていくっていうのが仕事だとは思うんですけど，その一方で，グレーな曖昧なところっていうのが，やはりこの身体運動文化の醍醐味なんじゃないかなと思ったりする。その辺を極に振れながらいるところなので，核心っていわれたら，今は一言では言えないんですけども，その広がりの中でものを見ていけるような人を育てないといけないとは思っています。

村田　ありがとうございます。今の寺山先生の話を聞いていて，筑波大学では，現在，舞踊は学部も大学院もコーチングの中に位置づいているのですが，以前は，学部は運動学（コーチング）に入り，大学院は体育学・体育科教育学に入っていたんです。そのねじれから，全部コーチングに移ることになり，その時，私は条件として，舞踊は多様な研究領域を含んで丸ごと（歴史も哲学も，文化の部分も，心理学も教育も全部含めて）そのままでコーチングに存在させてくださいってお願いしました。やっぱりコーチングでは狭いので。

そういう意味でいうと，戦後，体育・スポーツとずっと並列できたのが，今，スポーツ庁をはじめあらゆる場面で体育という名称がなくなりスポーツに一本化されてきています。今，残っているのは，学校の教科名としての体育ぐらいです。だから，スポーツイコール競技スポーツではなく，体育的なものや非競争やダンスも入ってくるっていった時に，今，舞踊が持つ多様性とか曖昧さみたいなのは，スポーツの中に入ることによって，ものすごく脆弱になるっていうのもすごく気になります。

このあたり，奥野先生何かありますか。

奥野　本学は，ご紹介したように，ダンスが「体育学」に含まれているということで，学校教育の体育の教員養成の一環で，ダンスの指導者として，指導力と資質を高めていくことに力を注いで取り組んでいます。実践力のある指導者，特に，実技力に裏付けされた指導力を身に付けるということを専攻コースでは目指しています。ここは今，頑張っているところでございます。

しかし，現在は学校教育の現場も事情が多様化していて，様々なダンス活動が行われています。本学のカリキュラム内容がそれらに対応できているのか不安です。幅広い体育・スポーツ領域のダンスに関わる指導者の養成ということでは，現行の「体育学」に置かれているダンスが，他コースと横断的に関わっていける内容に広がることが，今後の本学における問題の解決につながるひとつではないかと考えます。

また，インターンシップのように，ダンスがフィールドワークとして外に出られるような状況が本学で可能になれば，それもダンスの多様化に対応できる方策ではないかと考えます。今後,「体育学」の中に閉じこもってしまっているという現状を少しでも打破したいというのが，私の個人的な考えでございます。

村田　ありがとうございました。では，松澤先生，どうぞ。

松澤　もう，皆さんおっしゃったとおりで，スペシャリストとジェネラリストの問題と，それから通底する普遍的な概念と，でも，そうじゃなくて，特殊概念とか，そこらへんをどうするかだよね。うちの学生にはとりあえず,「踊りバカにはなるなよ」って言って，それで「考える舞踊人になろうね」って言って,「考えるって，何を考えるんですか」って言うから,「何を考えるかを考えればいい」って言ってるんですけど。さっき言ったように，うちは体育学部に入って，例えば，スポーツ心理やダンスセラピーがあったり，そこで何が違うんだとかっていうところで，特化はできるんだよね。ダンスとか身体の問題とかね。かといって，同じ種類だしという枠組みの中での通底する考え。だから，スペシャリスト的なところとジェネラリスト的，特化することと普遍化することの両方を学んで，そこから先，より良く生きていってちょうだいねっていうぐらい。

村田　先ほど，ここに参加の群馬大学の木山先生とお会いして，教育学部の状況を聞き，もう悲惨になって，明日はないっていう状況のようです。教員数がどんどん人が減って，学生数も減って，ダンスが必修化されているのに。体育・スポーツは総合的なので，いろんなところに吸収されて草刈り場になりやすい。それと同じで，ダンスも多様でいろんなことに使われやすい。いろんなところで同様の苦悩を味わっていらっしゃる先生もいらっしゃると思います。

では，木山先生，どうぞ。

木山　その悲惨な状況を少しだけお話しさせていただきます。群馬大学の教育学部は，まさに教員養成学部であって，１学年が220人で，保健体育専攻生は20人います。これが18歳人口の減少等々で，来年度からは１学年200人，保健体育の専攻生は17人に減っています。大学としてのミッションを，文科省からかなり厳しくいわれていて，要

するに，この200人を全て学校の先生にさせろというのが文科省からのお達しで，われわれ教員にも，予備校みたいですけど，何パーセントは群馬の教員にさせなさいという数値目標まで，課されています。

その保健体育講座の教員は，今は６名おります。しかし，このうちの２名が今年度から着任していただいたので，昨年度は４人という人数の中で教育をしておりまして，その新しい方を採るにあたっても，絶対この先生が必要だというのを，３年間ずっと学長に言い続けて，やっと人事が決まりました。

また，来年度，多分，日本で初めてとなると思われるんですけど，宇都宮大学との共同教育学部というのがスタートします。これも本当に６月，今月の申請が下りたらの話なんですけど，これも文科省が推し進めてきた教育学部縮小に一番乗りをしたということで，その特徴的なものはメディア授業です。もちろん体育実技は外されましたけれども，体育の中でも体育原理であるとか，学校保健であるとか，要するに座学のものは，いくつかメディア授業の指定を受けています。これもどう進めていくか頭を悩ましているところです。以上，教育学部の現状です。

村田　昔出た群玉大学じゃなくて，群栃大学ということですね。

Ａ（フロアの男性）　現場の経験者から言いますと，中学の体育の先生と私，管理職で，一緒に相談して年間計画を作っていた時にね，どうあがいても，特活とダンスの授業を全部まとめると，中３の場合，13時間程度しかとれない。その中で，創作というニュアンスが完全に消えちゃって，振り付け，押し付け。その中でどうするかっていう現場があるんです。創作っていう，そのゆとりが今ないんです。そうすると，真の喜びというか，自分が創ったものという実感がないんですね。そこら辺の指導方法というのが見栄え重視になってきたんではなかろうかという思いも込めて，現場の報告をしました。

村田　今，フロアからも出されたように，現場の問題っていうのは，裏を返せば，大学でのダンス教育がどうなっていたかっていうことでもあるんですね。やっぱり，クリエイティブな精神と指導法が，ちゃんときちっとしたものにしなければいけないと痛感します。

松澤　一つ聞いていい？　LGBT問題は，どういうふうに他の大学の方はなさっているか。これは女子大の場合ですけども，お茶大は，何か出したんだよね。

福本　はい。

松澤　ですよね。だから，すごいなと思って。他の私立大学とか女子大の方だとかは，何かそういう問題とかっていうのはあります？　もしあれば教えてください。

奥野　ジェンダー学会の先生がいらっしゃったので，取り組もうとしてはいましたが，結論は出てないですね。

福本　トランスジェンダーのことですか。猪崎先生がいらっしゃるので先生からお願いします。

猪崎　お茶の水女子大学では，2020年度より自身の性自認にもとづき，女子大学で学ぶことを希望する人（戸籍上男性であっても性自認が女性であるトランスジェンダー学生）を受入れることを決定しました。

松澤　それは認定して，証明書とか要るの？

猪崎　それはトランスジェンダー学生対応ガイドラインが策定されています。入学を志願するトランスジェンダーの方は，入試の出願１ヶ月前までに必ず入試課に申し出てもらうようにしています。出願資格の確認は，出願申出書に基づく性自認が女性であることの確認をします。これは，あくまでも出願資格の確認ですので，合格するかどうかは次のステップになります。

松澤　また別問題なんだな。

猪崎　舞踊教育学コースでの実技授業では，トランスジェンダー学生の受け入れはどのように考えるかと問われました。福本先生をはじめ，コースの先生方に検討していただいて，そこは問題ないだろうということです。大学は教育環境に対して，トイレとか更衣室などを整えています。今年から入学試験があるので，大学ホームページ上に，情報が掲載されています。

松澤　でも，動き出してるんですね。

猪崎　はい。動き出しています。

松澤　問題意識を持ってるっていうだけでも，十分です。

村田　まだ議論したいことはいっぱいあるのですが，時間が残り少なくなってしまいました。

今回，大学院生が研究発表してくださいましたので，感想も含めてどうぞ。

Ｂ（フロアの女性）　きょう，一番印象に残ったのが，寺山先生がおっしゃった，スポーツとしてのダンスというイメージと，芸術として捉えるダンスというものを混同することの是非のような問題意識を持たれていたことです。というのも，芸術としてのダンスを研究するための場というものが，日本においてかなり少ないなと感じていましたので。そういった問題意識があがったのは，私自身も進路を決める時とか，大学選びの時にいろいろ悩んだことでもあるので，今日は私にとって収穫があったなと思いました。ありがとうございました。

Ｃ（フロアの女性）　お茶大の博士課程の原と申します。私は大学の仕組みについては詳しくはな

いですが，やっぱりダンスを一般的教養の授業として大学でできるっていうのがあるといいなと思うんです。ダンスの専門を育てるのがメインにはなるとは思うんですけれども，やっぱり体育っていうのとも違って，一般教養としての一つの科目として，ダンスだったり舞踊の何かがあるっていうのは，舞踊の力を考えていく上では，すごい重要なことなのではないかなと思っていて。先生方にいろいろお話を伺ってみたいなと，今日は思いました。

村田　今，言われたように，一般教養の中で，ダンスの内容をどのようにしていくかっていう課題もあります。今日は教員養成と専門のダンスのカリキュラムっていうところに絞ってしまいましたが，実際に一般教育を持たれて，専門教育ではないところで，きちっとダンスも広げていくことも重要ですね。

福本　私の関心なんですが，例えば日女体とか東女体，筑波でも，筑波は教員養成っていうのが非常に印象として強いと思うんですが。国際的に見た場合に，日本に留学してくる学生を呼び込めますか？という側面はどうでしょうか。つまり，ここ［松澤先生の配布資料］にたくさんの科目があるのですが，多くのものが輸入文化である，という辛さがあると思うのですが。

松澤　僕，本当は交換留学をやりたいので，それは切実に，実際的な問題です。

福本　奥野先生の所は，伊澤ユイとか，それこそ，そういう日本のものを主導されてきたってところがあると思うので，ちょっと事情が違うのかなと思うのですが，いかがですか。

奥野　海外へのとか，留学生へのという，そういう展望については，本学は大学院の展望も現在はございませんので。本学は，学校教育の体育の教員養成の一環で，ダンスの指導者としての指導力と資質の向上に取り組んでいます。伊澤ユイ先生は，実際には，表現や創作の指導もされていたと聞いていますが，「芸術は教えられません」という立場で，自身の文献にもそう記しておられます。藤村トヨ先生は曹洞禅の実践者で，禅的な教育を本学で行っていました。ですので，実践より学ぶという立場です。身体からの学びに視点がありました。その様な流れの中で，もう120年来ておりますので，それらを考えますと，先生のご質問に対して，いいお答えができないかと思いますけれども。

福本　いえ，これまで私は，藤村トヨの方法論というか，教材がこれほどあるというのを知りませんでした。が，それを今のダンスサイエンスなりソマティクスなり，今の舞踊教育法の視点から，その価値を再評価していくことができれば，日本のオリジナルの発信につながる可能性があるなという気がしました。

奥野　ありがとうございます。

村田　寺山先生，何かありますか。

寺山　実は筑波大では，18歳人口が減少するので，外国人を入れようと，体育系に来る学生はいるか，今，リサーチをしているんです。いろんな種目の先生が各国にリサーチに行ってるんですけど，結局，武道だとか日本固有のものだったら，絶対，日本でっていう人は多いだろう，そこが狙い目なんですけど。陸上だとか体操競技だとかはほぼいない，ダンスも，よっぽどの何かがないといないんじゃないか，そういう意味では，あまり明るい話ではないです。逆に，グローバルなことをすごく推しているので，いろんなプログラムがあって，学生は行こうと思えばいくらでも行ける環境はありますし，そういう奨学金を出すような形はたくさんあります。

私も入学したときに，体育学部にダンスがあるのが分からなかったんですね。体育したいわけじゃないし，踊れると思って来ただけで入っちゃった。気が付いたら体育のことばっかりして，何だ，ここ，みたいな気持ちが長かったんです。でも，体育で結構，変わるんですよね。体育ってすごい教科なんだなと思い出してから，ちょっと受け入れるようになっていったんです。なので，芸術と体育って違うけど，共通点もあるっていうのも，今の見解ではあります。

福本先生の質問とずれちゃうんですけど，結局，私が外国に行って，理想の体育像みたいなものを求めてよいダンス教育が外にあるんじゃないかと思って，結構，見させていただいたりもしたんですけど，結論からいうと，日本の体育って進んでるなっていう，逆の見解に至ったんですよ。欧米って，スポーツだけとかダンスだけとか，動いてりゃいいって言ったら失礼ですけど，ただやればいいみたいな感じもちょっと見受けられる感じがあって。日本の体育って，身体をどう教育するかみたいなところで，そういう意味では，進んだ発想だとは思うんですね。

ゆえに，日本では，体育にダンスも体操も含めて展開してきたっていう歴史があるのかなと思うと，今，体育を捨てて，スポーツ一辺倒に，日本がなっていっちゃうとなると，もっと競技性だとかお金だとかっていうことにシフトしていくのかなって少し不安に思ってたりします。逆に今，日本のこういう発想をいかにして外国にアピールできるっていうのもあるんじゃないかなという希望は持っています。そういうふうに海外と交流できないかなと思って。

村田　ありがとうございました。今，日本は体育の中でダンスが育ってきたという，欧米とは違う土台をもっていることへの再評価ですね。これま

でどちらかというと，体育的発想ではまり切らないダンスが，体育の中で何となく厄介者だったんですが，近年，逆にダンスの異質性が，実は次の学習モデルになるんだっていうニューリーダーたちもたくさんいますので，体育の中で，異質な学びとしてダンスの存在意義は今後ますます高まっていくと思っています。

私の進め方が悪くて５分過ぎてしまいました。議論も白熱し，いろいろ残した問題はありますが，それはまた12月の学会大会に連動していけばいいなと考えています。皆さんには本日の議論を頭の片隅に置いて，12月の大会にまた参加していただければと思います。

お忙しい中を話題提供していただいた５名の先生方，本当にありがとうございました。

（文責：村田芳子）